

# 東明慧日禅師の大きな足跡

中島 満 (なかじま・みつる)

## はじめに

白雲庵の開祖である、東明慧日禅師とうみんえいちという方は、どのような人物であったのでしょうか。

鎌倉を訪れる一市民が普通に手にとることのできる旅行案内記の情報からは、鎌倉幕府の執権であった北条貞時ほつじょうさだときの招請によって来朝し、日本に曹洞宗を伝えた第二番目の禅僧であること(一番目は道元禅師どうげんです)、円覚寺や建長寺の住持じゅうぢ〔寺の最高責任者住職〕であったこと、円覚寺白雲庵の開祖であること、

たち、禅師が創られた白雲庵の現在までの歴史をふりかえった『白雲庵物語』をまとめることになりました。

そしてこれを機に東明慧日禅師の足跡と禅師の業績を、檀家の方々ばかりでなく、ひろく鎌倉を訪れる人々にも知っていただけのような平易な文体で記述していくことになりました。東明慧日禅師については、『円覚寺史』(一九六四年刊)(以下略



鎌倉五山文学の興隆期に白雲庵学林の師として多くの学僧を育てたこと、そして、現在でも白雲庵本堂の静かな空間に清浄にして凜りんとした気を放つ姿で座し続ける「東明慧日木像」(国指定文化財。左ページ画像―「白雲庵物語」グラビアより)を解説する文章によって知ることができるぐらいでしょう。

日本に禅宗をひろめた鎌倉時代ごろの僧にかぎれば、日本臨濟宗開祖の栄西禅師えいさい、日本曹洞宗の開祖である道元禅師、円覚寺開祖の無学祖元禅師むがくそげんや、京都五山派の夢窓疎石禅師むそうそせきという有名な方々についてなら、入門書や辞典を含めてたくさん論評や伝記に、その人物像が描かれていますから、いつでも知りたい知識を求めることができます。

しかし、禅が日本ばかりか世界中でひろまってきた歴史の中で、創始期に来朝した東明慧日禅師については、よほどの禅についての勉強家か、専門の研究者がいには、多くを語られることがなかったようです。

東明慧日禅師が日本に渡ってこられてからちようど七百年が称「寺史」、『建長寺史 編年資料編 第一巻』(二〇〇三年刊)(以下略称「建長寺史資料編」)や白雲庵所蔵資料の中で触れられてきましたが、これらの寺誌正史の記述を支えてきた、中世禅宗史研究者によって解明されてきた東明慧日の禅宗や文学の上での業績をふまえて、できる限りわかりやすい文体の伝記として紹介してみよう。

これまで、東明慧日禅師の足跡と業績をまとめた伝記については、東明慧日禅師の弟子たちが語録として残した「東明和尚語録」(以下略記するばあいは「語録」とします)及び、同語録に併載される「東明慧日塔銘」とうめい(略記「塔銘」)があります。この二つの基本史料は、すでに室町時代に「五山版」といわれる僧院で刷られた木刷本がのこるほか、江戸時代初期にも「東明和尚語録」三卷(白雲東明禅師語録)が出版されています。すべて漢文で記されていますが、現在では、『円覚寺史』の著者であり、『建長寺史』の編著者でもある玉村竹二先生の長年の研究成果として刊行された『五山文学新集』別巻2(一九八一年

刊)に収録、翻刻(活字化)出版されています。

このほかに、東明慧日を記した資料として、秀恕著になる曹洞宗僧侶列伝『日本洞上聯燈録』(享保二十・一七三五年刊)巻一(略記「聯燈録」)や、正元師蠻が著した『本朝高僧伝』(元禄十五・一七〇二年刊)巻二十六(略記「高僧伝」)などに一項をたてて記されています。

また、こうした一次資料(原典)と禅宗史研究の成果としての、東明慧日禅師の伝記、及び伝記的記述を含む研究論考のうちで、本稿記述内容の考証・典拠とさせていただいた著作は以下のとおりです。

- (1) 「東明慧日の宗風とその門流」 大久保道舟著(一九二五年、駒澤大学内和融社『第一義』所収)(引用略記①)

(2) 「白雲東明和尚語録」及び「東明慧日略年譜」  
石川力山著(一九七五年、曹洞宗研究員研究生『研究

紀要』第7号所収)(引用略記②)

- (3) 「解題 東明和尚語録」玉村竹二著(一九八一年、東京大学出版会。同氏編『五山文学新集』別巻2所収)(引用略記③)

(4) 『五山禅僧伝記集成 新装版』玉村竹二著(二〇〇二年、思文閣出版(一九八三年講談社版の修訂復刊)。「東明慧日」ほか関係僧の項)(引用略記④)

(5) 「元代曹洞禅僧列伝(中)——東明慧日と東陵永璵の来日以前の動静」佐藤秀孝著(一九九三年、『駒澤大学佛教學部研究紀要』第五十一号所収)(引用略記⑤)

(6) 「明州天寧寺の直翁可挙について——南宋末元初における曹洞宗宏智派の動向」佐藤秀孝著(二〇〇四年、『駒澤大学佛教學部研究紀要』第六十二号所収)(引用略記⑥)

このほかにも参考にしなければいけない論考著作はあります

が、いちおう限定して六文献をもとにつづることにしました。また、東明慧日の弟子たちの残した詩集や詩文集、語録など五山文学に関する著作や、禅宗史・禅語・佛教語にかんする著作、辞典等の参考文献とともに、文末に一括掲載しました。

また、東明慧日の呼び名は研究者により「とうみんえにち」「とうみょうえにち」が使われていますが、上記研究者および「新版禅学大辞典」(大修館書店)が使用している道号の読み方「とうみん」を採り、法諱〔受戒した後に名のる法名・諱〕イミナは、旧字体を使った「慧日」(えにち)として、「とうみんえにち」に統一しました。そのほかの歴史的な記述に現れる、僧についての、道号・法諱(明庵・栄西、希玄・道元)や、他の人名、禅宗に関する用語は原則的に新字体を使用しました。また、生年、渡来年や事蹟業績に関して①から⑥までの論考から、よりわかりやすいと筆者の判断をした説を採用させていただき、建長寺住持在位回数など三回説と五回説のように異なる場合は、出典を明記して紹介しました。ただし、よりわかりや

すく読みやすい文章にするという編者の意図をくみ、原則根拠とすべき出典は、逐一、記しませんでした。

編者から、執筆依頼を受けてから、禅宗の歴史と東明慧日に関する事蹟や評価などを、項目別に年表のかたちで、エクセルのマスに埋めて整理を試みました(資料「東明慧日事蹟年譜」参照)。この年表をもとにして、手元を集めた関係論考・誌史料を読みすすめていくうちに、気づいたことがあります。

鎌倉時代後期の南北朝時代から室町時代にかけて宗教者たちが政争に巻き込まれた、まさに歴史的な動乱期に、「青天在水」と「塔銘」に表現された、東明慧日の曇りのない懐の大きなひとがらを慕う宗派を超えた僧侶たちが、住持の寺院ばかりか、自身が退去寮として創った白雲庵に全国から集まっていたのです。

東明派、あるいは白雲庵門徒とよばれた東明慧日の教えを受けた弟子たちに信頼尊敬されたばかりでなく、曹洞他派、異宗派の僧侶たちから、また時代の流れのなかにあつて、その業績

を軽んじられるような政争に巻き込まれながらも、結果として、寺の再建のために和と統一を果たすことのできる、他に得がたき人材として、また、寺の最高責任者として、何度も登用され続ける東明慧日像が浮き彫りにされてきました。

卑近な例でたとえるなら、「東明慧日」は「広辞苑」に載っていません。しかし、歴史上の名僧としての名を残せなかったような僧侶であったとはとうていおもわれません。時の執権北条貞時に強く請われ重職につきます。貞時亡き後も、貞時を継いだ熙時ひろとき、基時もととき、高時たかときという鎌倉幕府末期の激動の時代、円覚寺住持職を解かれることなく八年間（一二三〇～一二三二）住持職をまつとうした事実も信頼の証といえるのでしよう。

その後、鎌倉幕府滅亡後においても、東明慧日禅師は、死と向きあう歳を迎え病に伏せがちとなりながら、後醍醐天皇の招請により、建長寺に五回めの再住（退院後あらためて住持職に就くこと）要請をうけます。また、円覚寺に第十世住持として八年在籍ののちにも再住二回を数えます。臨済宗一色であった

いものまでもが「なにが異色人事なの」と興味をそそられます。

鎌倉幕府執権、北条時宗は、円覚寺開山の高僧、無学祖元むがくそげん（一二二六～一二八六。仏光国師）を招請し、禅宗に帰依し、臨済宗を中心にすえた寺領整備を行い、一段落したのち、弘安七年（一二八四）卒去そつきよします。

次代執権に北条貞時がつき、時宗以上に禅宗を重んじます。円覚寺は「度々の火災にもかかわらず、伽藍の周備という外観ばかりでなく、歴代の住持にも、その人を得て、会下えか（僧が修行する場所）は空前の盛況を呈し、円覚寺の宗旨挙場の最盛期」（「円覚寺史」）を迎えていました。

中国では、元が統一国家成立を直前にしており、文永・弘安の役という二度の元寇を幸運にも撃破し、その後元国の正式使者として来朝した元国僧、一山一寧いちざんいちねい（臨済宗。没後、一山国師。）を、貞時は、元国のスパイという周囲の批判と忠告により鎌倉に入らず、伊豆修善寺に幽閉しますが、それほどの時を経ずして宗教的な師として、また学芸に渡る豊かな才能を認め、

鎌倉五山の禅宗界にあつて、この経歴は、東明禅師の曹洞宗そうとうしゅう宏智派わんしはが、道元を祖とする日本曹洞宗に対し決定的な少数派であったことを考慮しても、禅僧東明慧日の歴史上の存在感の大きさを示すものです。

東明慧日禅師についてその足跡を現代、眼にできる資料を読みすすめるだけでも、歴史的な再評価に値するような、激動を生き抜いた名僧の姿が浮かび上がってきました。

禅宗草創期の原点に位置する一人の禅僧の足跡をたどりながら、鎌倉円覚寺に生れたひとつの草庵の歴史をさかのぼってみることにしましょう。

## 異色の人事——曹洞宗宏智派の僧を招請

『円覚寺史』のなかでは、東明慧日とうみんえにちが来朝するきっかけについて「異色の人事」であったという紹介のされ方で東明慧日が登場します。東明慧日の来朝の背景が、簡潔に示されて、知らな

円覚寺・建長寺を兼管させるなど重用することになります。一寧禅師の卓抜な才能は、鎌倉の地で開花し、宗旨だけではなく学芸などに有能な人材が、貞時政権下の鎌倉の僧坊に集まっていたのです。

まさに、そのようなときに東明慧日は招請されたのでした。『円覚寺史』は次のように、書いています。

「さて、いよいよ東明慧日について述べなければならぬ。東明は、明州（浙江省）定海県の沈氏の出身。九歳で奉化ほうかの大同寺に出家し、十七歳で具足戒をうけ、曹洞宗宏智派わんしはの尊宿、直翁徳挙じきおうとくきよに、明州天寧寺に参じて契悟かいご（悟りを得ること）し、その後、諸方を歴参し、大徳六年（日本暦・正安四年・一二三〇二年）白雲山宝慶寺ほうきやうじに住し、直翁の法ほうを嗣ついだ。即ち曹洞宗の人である。」

そうなのです。それまで、日本に禅宗をつたえた渡来僧のす

べてが臨済宗の師の法嗣〔法統をうけ嗣いだ弟子〕をうけた禅僧であり、中国からの渡来僧としては、東明慧日が、曹洞宗の法を嗣いで日本にやってきた初めての禅僧であったのです。冒頭書いたように、日本に初めて曹洞宗を伝えた僧が道元禅師ですが、曹洞宗第二番目の僧が東明慧日禅師でした。

それでは、東明慧日の禅宗は、道元が中国で学び、法嗣をうけてきた曹洞禅とはどう異なっていたのでしょうか。前記引用に続けて、「寺史」に付された注で、中国宋の時代のころまでに興隆していた禅宗のなかで曹洞宗に属する系譜を次のように説明しています。

「曹洞宗も、丹霞子淳（一〇六四～一一一七）のもとで真歇清了（一〇八八～一一五二）の一派と宏智正覚（一〇九一～一一五七）の一派に分かれ、永平道元の伝法したのは、このうち真渴派であり、宏智派は、これと別派である。」

中国僧として、曹洞宗宏智派であった直翁徳挙を法の師とする東明慧日禅師は、延慶元年（一二三〇）に北條貞時の熱心な招請に応じて来朝しました。三十七歳のときでした。

そして、『円覚寺史』では、さらに、東明慧日の履歴について、「従来の来朝僧がことごとく臨済宗であるのに対して、これは極めて異色ある人事であり、こんな点にも、貞時の禅宗に対する造詣が深かったことを示すものがある。」（傍点筆者付加。以下同）と書いています。

ここに記された北条貞時の禅宗に対する「造詣」の深さをものがたるように、一山一寧禅師をはじめとする、これまでの渡来僧や、帰朝した日本僧等から、中国の禅宗界について教義や、人脈や、僧の人がらにわたるまで、そうとうにこまかな情報を良く集め、とてもよく勉強をしていたといえます。

禅宗史・五山文学研究の第一人者である玉村竹二先生（元・東京大学史料編纂所教授）の著作のなかでも、とくに、貞時の

慧日招請の背景にふれて、中国においては、臨済・曹洞の二つの禅宗が派を分けていても、仲良く混在して活動しているのに、

「顧みて日本の禅林をみると、大部分は臨済宗のみで、曹洞宗としては、永平道元下の一派があるが、中央の禅林からはまったく孤絶して越前の辺陲〔片田舎のこと〕にあるにすぎず、ここに鎌倉の禅林は悉く臨済宗のみであった。」④と書いています。

そこで、北条貞時は、中国禅林と同じように、臨済・曹洞が共存する環境を作り出すことこそが、いっそうの禅宗隆盛に結び付くはず、と考えたのでした。

その考えを実現させるために、うつてつけの人材として、宗派法統を超えて多くの僧たちと交流し研鑽を重ねていた、

東明慧日禅師に白羽の矢が立つこととなったのです。

## 慧日渡来年の特定——延慶元年説の根拠

東明慧日がいつ来朝したかについては、すでに、延慶元年（一

三〇八）と特定して書きました。しかし、実は、その翌年の延慶二年（一二三〇）来朝説の二説が存在しています。

一三〇八年説を採用する根拠はどこにあるのかを次に示しておきましょう。

まず、『一三〇九年説』は、東明慧日の入寂〔僧侶が亡くなること〕後、墓にあたる大明塔建立の際に収められた東明の履歴業績を記した「塔銘」をはじめ、「聯燈録」、「高僧伝」の記述がもととなっています。

「塔銘」は、東明慧日に長く随侍した高弟であり、白雲庵学徒のリーダー的存在であった不聞契聞（一二三〇～一二三六）が行状を記し、その記述（その原文は佚われ今に伝わっていません）をもとにして東明慧日の同郷（明州：浙江省地方）出身の臨済宗渡来僧、竺仙梵僊（一二九二～一三四八）が撰述したものです。「已酉歲」「日本延慶二年」、つまり一三〇九年に日本よりの招請により鎌倉の地に至ったと記されています。「聯燈録」「高僧伝」も、「塔銘」の記述がもとになったものとおもわ

れ、ほぼ同じ記述になっています。

つぎの、『一三〇八年説』は、「語録」に記されている「歳は、戊申ぼしんの冬に、相州鎌倉に來ました。太守（北条貞時）に請われ、臘八ろうはつの十二月八日に陞座説法を行いました云々」（「語録」―東明慧日禪師住白雲山宝慶禪寺語録卷上）という内容の漢文の文章がもとになっています。

「戊申（ぼしん）」は、干支えとの組み合わせで年号をあらわす記しかたで「ツチノエ・サル」と読み、延慶元年（一三〇八）をさしています。この説は、鎌倉五山の沿革を記した古書「扶桑ふそう五山記」（鎌倉市文化財史料第二集所収）においても「東明和上」來朝年として記述しています。

二つの説のどちらが正しいのでしょうか。

東明慧日の入朝と鎌倉入りの年を同年、その年の十二月八日に貞時の要請で説法を行ったとします。そして、それ以後の東明慧日と貞時の判明している行状を整理すれば、次のような順に進んだことがわかっています。

(1) 冬に鎌倉入りし十二月八日説法を行う。

(2) (1)の翌年。貞時の要請で東明慧日鎌倉禪興寺の住持に就く。

(3) (2)の翌年。同じく東明慧日円覚寺入院、第十世住持に就く。

(4) 応長元年（一三二一）十二月二十六日貞時死去、東明慧日仏事を執り行う。

つまり、一三〇九年説を採ろうとすると、(4)の歴史的な事実に一年ずつのズレが生じて合わなくなることから、年月が明示された史料のない(1)、(2)、(3)を無理なく充たさせようとする、一三〇八年が妥当ということが大筋の論拠になり有力であることがわかります。

このほか、東明慧日禪師の弟子の慧日との会見記録なども根拠として補強することができそうです。推論の根拠は少しずつ異なりますが、來朝年を一三〇八年とする説は、前述した①

の大久保道舟氏、②の石川力山氏、③④の玉村竹二氏、⑤⑥の

佐藤秀孝氏ら、東明慧日を伝記の記述として整理研究したうえで主張されているものです。また、『円覚寺史』『建長寺史』においても、採用されるところとなっています。『白雲庵物語』も、この一三〇八年來朝説を採ることにいたします。

こうして、來朝した「一三〇八年」を「一年」として数えろと、「平成十九年」の「二〇〇七年」が、白雲庵開山東明慧日禪師來朝七百年の記念すべき節目の年にあたります。

## 招請してくれた後援者貞時を失う

東明慧日來朝の年を一三〇八年として、『円覚寺史』は、「來朝の歳の臘八ろうはつ」お釈迦さまが臘月、十二月の八日に悟りを開かれたことからこの日をこう呼びます」に、貞時は、東明慧日に陞座説法しんぞせつぽう「僧が上座の法座にのぼり説法を行う」を請い、翌延慶二年（一三〇九）、ひとまず禪興寺に住せしめ、その翌三年

(一三二一〇) 円覚寺住持に任命した。」と記しています。

禪興寺ぜんこうじは、明治に廃絶していますが、開山者の墓として建てられた塔頭たっちゅう「明月庵めいげつあん」を名月院として復興し、現在「あじさい寺」として鎌倉の観光スポットとしてしてそのよすがを伝えています。

そして、東明慧日の「來朝」の意義の重さについて、大久保道舟論文①の「北條貞時の帰依と禪興寺開堂」に次のように書いています。

「東明の到來が官の公式的招請であることは、塔銘の叙に、〈属日本馳書礼請〉とあるを見ても明かである。彼は、まづ鎌倉に入って北條貞時の帰依を受けた。貞時は時宗のあとを継いで執権の重職に就き、弘安七年七月より正安三年八月三十一歳を以って出家するまで、約十七年間幕府の政治に參與していた。その間永仁元年六月二十五日には尾张国篠木莊を円覚寺に寄せて「つまり寄進させて」再建を企

て、或は永仁二年正月には、諸寺の禁制条目を制定してその清規を釐正〔りせい。正しく収めること。〕し、或は、正安元年には、元僧、一山一寧を迎えて伊豆修善寺を置き、のち建長寺に請する等、禅法興隆のためには幾多の貢献をなしている。出家の後は法名を崇暁〔すうぎょう〕と名づけ、後、崇演〔すうえん〕と改め、東明の到来するや、これを相模禅興寺に請して、その宗乗を聞き、益々自己の修養に努むるところがあつた。〕

東明慧日禅師は、この陞座説法しんざに際して、貞時の法愛を深く謝し、自分を日本へと呼んでくれたことへの謝意を「語録」のなかで、大意、次のように語つたといひます。

「仏の知見を悟り成道した私ぼさつかい（東明）が菩薩戒という戒律を守る弟子崇演（貞時）にたいし宝炉をたき、普く法界衆生のために奉じよう。遠く中国で修行を積んできた私のよ

うな僧を請うて、仏成道のこの日に、命じて、最初の法輪を転じることが出来ることは、これほどに慶ばしく光榮に思うことはありません。」（「語録」——東明慧日禅師住白雲山宝慶禅寺語録卷上より）

こうして、東明慧日禅師は、来朝の翌々年、延慶三年（一一八〇）円覚寺第十世住持に就きました。「語録」（瑞鹿山円覚興聖禅寺語録）中の入院じゅえん〔命をうけた住持が寺に入ること〕にふれた法語の一節に「笑花眼活、万国同春」が見えることから、大久保道舟氏は、「おそらく花咲く三月の侯ではなかつたか」①と書いています。

また、入院の日の翌日にも、北条氏（功德主）のために開堂し、東明慧日禅師が伝えた法語のなかで、「靈機妙転シ、清塞外ニ掃ヒ、省平ヲ見ル云々」とあります。語の大意をくみ取れば、元寇という外敵を「塞外」（国の外）に追い払い平和を得た日本に請われてやってきて、仕事ができることを力説しています。

しかし、このように、東明慧日禅師に対する期待も大きく、また篤く遇した北条貞時は、東明が円覚寺第十世住持となつた、その翌年、応長元年（一一三二）十月二十六日に四十一歳で卒去してしまいます。

大久保道舟氏は、「東明の失意はいかばかりであつたらうか」と禅師の心情を書いています。東明慧日禅師は、最勝園寺殿さいしょうおんじでん（貞時の没後の呼び名）の葬儀にあたって、秉炬ひんこ〔茶毘の火をともし引導の法語を唱える〕仏事の導師となつて厚く葬つたのでした。

さらに、最強の後援者を失つた東明に、行く末を案ずる心が生じたことは自然のことであると思ひます。

## 円覚寺住持八年間の功績——白雲庵開創見覚悟

さらに、最強の後援者を失つた東明に、行く末を案ずる心が生じたことは自然のことであると思ひます

「塔銘」によれば、円覚寺住持職についてから「未だ、いくばくも経ずして、自ら休蔵の所を求め、円覚の隴西ろうせいに庵室を建て、その地を白雲庵と名づけた」と記しています。

この、記述は、普通に読めば、来朝し、円覚寺に入り、貞時の許しを得て、引退後の休息地として、そして死後の墓としての塔を立てるための退去庵を建てたということになっています。このような許可は、生前の権力者貞時から得ていたかもしれませんが、円覚寺入院直後には、あくまで推測ですが、具体的な行動に移すことはなかつたとおもわれます。「白雲庵」開創の具体的創建の時期は、円覚寺住持就任の延慶三年（一一三〇）以降、「大体正和年中（一一三二〜一一三六）の間」（『円覚寺史』一二九頁）を推測する以外に確たる根拠を示す史料はないようです。

東明禅師は、貞時という後ろ盾を失い、自らが修行の地であり、師から法を嗣いだ明州白雲禅寺（白雲山宝慶寺）の「白雲」に重ねた庵に移るときが近い、みずから近づいている境遇を

思い描いたとしてもおかしくはない状況になっていたのでしょう。母国中国においては、元はすでに南宋をほろぼし、日本に渡来する僧たちのなかには、いわば亡命に近い覚悟の出国を図って日本の地に足を踏み入れたものもいたはずで、このような国際的な時代背景を考えれば、「隴西」とは中国にある「隴山」に見立てた高台、つまり円覚寺の西の高台の一角に、帰国という望郷の思いを封印し、自らの身を置く拠点を「休蔵」の場と表現をして、白雲庵を創建したということも考えられるかもしれません。

先に渡来した円覚寺開山の無学祖元禪師は、弘安二年（一二七九）に来朝しますが、数年日本に滞留して帰国したい意向を強く持っていたといえます。無学祖元禪師の法語集である「仏光録」に載る偈頌「詩句で教えを示すこと」には、「辞檀那求帰唐」や「五年帰夢落滄州」のような望郷の念を断ちがたく、帰国の意思表示を示していたことが『円覚寺史』にも引用され記されています。

貞時の葬儀挙行後、東明慧日禪師の事跡として三つの重要な出来事が起こっています。

(1) 正和三年（一二三二） 第十二代執権北条熙時の請を受けて円覚寺開基、北条時宗の三十三回忌仏事を修

し、東明禪師は陸座説法行っています③④。

(2) 正和五年（一二三六） 鎌倉に大地震が襲い、円覚

寺仏殿、方丈、佛日庵などが倒壊します。「劫火洞然、大千俱壞、未審云々」と、「語録―円覚語録」に記されています。僧堂が火に包まれ倒壊しているという知らせをうけ、東明慧日禪師が上堂します。焼き尽くされ灰になる（劫火）光景に、ただ「洞然」となすすべもなく一人立ち尽くす東明禪師の様子がドキュメンタリータッチの表現で記録されているのです。その被害

は、いかばかりのものか、すぐにはわからないほどであったといえます。そして、「語録」に「退院請回上堂」とあり、東明禪師は、僧堂の被害を防ぐことができず、

円覚寺開山の役目も大檀那（時宗）の要請を請けて無事勤めおえたのだから、帰国したいということであったようです。しかし、その願いはかなうことはありませんでした。歴史に登場する高名な禅僧たちといえば、厳格な姿、人格をすぐ思いうかべますが、このように、寺の正史の記録の中にも、一人の人間として身の上話のようなエピソードが織り込まれている記述を見つけることができます。

東明禪師も具体的な記述は見つかりませんが、このような背景を斟酌すれば、白雲庵創建は、雑念を払い、退路を断つ覚悟のあらわれでもあったのかもしれませんが、そのように考えれば、想像に過ぎませんが、貞時の死がきっかけとなって、葬儀を終えた直後にすぐに退去の準備のために白雲庵を建てたと考えることもできるのかもしれませんが。

東明禪師の円覚寺在任は、貞時から執権職を継いだ、熙時、基時をへて実質鎌倉幕府最後の執権となる高時の代にまたがる文保元年（一二三二）まで八年に及びました。

震火の責を負いたいと、退院「住持辞職。「ついでん」とも読みます」を願い出ています。幕府に対するその願いは許されることなく、復興に力を尽せということであったようです。東明禪師は、その後の「語録」に「新修仏殿仏像安座」「大光明殿」（仏殿）、「平等軒」（方丈）、「佛日庵」（檀那塔）の語が見えることから、復興に心血を注ぎ、寿福寺に遷住する翌年末（一二三七）ごろまでに復興をみごと達成させています。年表を整理しながら少々、短時日過ぎる気がしないでもありませんが、すくなくとも、こうした決意と行動が示されたことは間違いないことであろうとおもいます。

(3) 正和四年（一二三五） 円覚寺文書に見える寺領荘園拡張、整備、寄進目録を円覚寺の次の住持（第十一世）となる南山土雲禪師（円爾弁田の法を嗣ぐ）に引き継いでいる記録が残っています。大久保道舟氏は、この文書の記録的価値に注目しました。そして、「富田荘御寄進状」

(弘安六年)、「亀山郷御寄進状」(同)など寺領整備や寄進状の記録を逐一あげながら、「円覚寺在任七年(実際は八年です)」を含めてそれまでの数十年間の円覚寺関連の財産目録ともいえる六〇通あまりの文書を東明慧日の筆で書き残している内容から、「その間の功績実にもるべきものがある」と、「一意山門の経済的興隆を策し」たことに高い評価を与えるべきであろう、と指摘しています。

## ①

こうした活躍の功績によって「白雲庵」創建が認められ、寿福寺遷住(一三二七)ごろ退去寮として創建成るという見方もできますが、このあたりの事蹟年次のこまかな検証は、これからの課題となるでしょう。いまから、七〇〇年前の歴史を東明慧日の事蹟に眼を向けるだけで、そうとうの具体的な当時の様子が浮き彫りにされてくるものです。

それにしても、東明慧日禅師の円覚寺時代の八年間の活躍は

眼を見張るものがあるといえましょう。こうした、経営手腕によつて有能な弟子たちとともに、鎌倉幕府滅亡というまさに、乱世を、異国の地で、業績を残していったわけです。東明慧日とすれば、本来の禅宗活動で評価を得たかったのかもしれないが、曹洞宗宏智派という小さな派閥の領袖として、やむをえなかったのかもしれない。現代的な経営センスの持ち主であったような気がしてきました。

北条高時の命で、円覚寺を退院し、寿福寺の第九世住持に就くときには、来朝からちょうど十年たち、東明禅師は四十六歳となっていました。

### 白雲山でつながった縁——中国における出生と出家

ここで、東明禅師が、来朝する前の中国(南宋から元)で禅僧としての修行時代から、曹洞宗宏智派そとうしゅうしゅうわんしはの直翁德举じきおうてくきよから法を嗣いだ話をすることにしましょう。

中国における東明慧日の行状と、東明慧日が法を嗣いだ師の直翁德举じきおうてくきよについては、駒澤大学佛教学部教授、佐藤秀孝先生の「元代曹洞禅僧列伝」(中⑤、下⑥)において詳細な研究成果が発表されております。新資料の発掘をふくめ、あらたな事実についても発表されております。

そのなかでも、東明の師、德举(あるいは一挙)の法諱(いみな)について、新しい史料発掘の成果として、直翁自らが「可举」(かきよ)と名乗っている事実から、「直翁可举」が正しい号と諱であると論じています。また、白雲庵という名前の由来ともなった明州(現在の浙江省寧波)近くの白雲山において「可举」と円覚寺開祖・無学祖元が道交を深めていたことも明らかにされています。

そして、東明慧日が、師、德举「可举」から法を嗣ぐときの経緯を詳細に検討して報告されるなど、これまでの東明慧日伝についての不明な部分が肉付けされ整ってきました。

つまり、「白雲庵」という名前の由来の背景には、東明慧日の

師である德举と円覚寺開祖の無学祖元禅師の中国における深い交友関係があつたこと、そして、德举の法を嗣いだ東明慧日が、師の元を離れ、諸国を遊歴し、曹洞禅を深める行脚をしながら、他派の臨済禅者たちと交流を深め、故郷に近い明堂で白雲山宝慶禅寺を開山すること、そして日本において白雲庵を創始し円覚寺を中心に活躍したこと、などが、すべてかかわりをもつてつながっている事実が、佐藤秀孝先生の中国宋・元における曹洞・臨在禅の発達と日本禅林との関係史の研究によつて明らかにされたことは、とても意義深いことであると思います。

北条貞時が、この三人の縁えにしを知って、東明慧日禅師の来朝を促したかどうかはわかりません。しかし、中国(南宋・元)においては宗派を超えた禅宗の活動が展開されている事実を知つたうえで、鎌倉禅の発展を願うために東明禅師を招請したことについては、冒頭の「異色の人事」の項に書いたとおりです。

中国における東明慧日の出生と出家についても、『円覚寺史』を引用して冒頭に書きましたが、そのもととなった「塔銘」の





既述をあらためて示すと、次のように書いています。

「明州定海沈氏子、生於趙宋咸淳壬申、歳九歳、於奉化大  
同寺出家、十三剃髮、十七受具戒。」

大意は、中国明州定海の沈氏の子として、咸淳壬申、つまり南宋咸淳八年（一二七二年）に生まれ、九歳のときに奉化にある大同寺で出家し、そこで十三歳のときに剃髮し、十七歳で具足戒をうけ僧侶となりました、ということなのです。

「明州定海」とは、現在の中国浙江省定海区にあたります。およそ揚子江河口南部、鎮海から舟山定海あたりのエリアをさすようです。奉化は、そこから南へ百キロほど下がった寧波市の西方にあります。大同寺について、佐藤秀孝先生は「奉化県西北二〇里に存した大同山報慈光巖禪院のことを指して」いると書いています。

東明慧日が具足戒を受けたのが年齢から算定すれば中国暦・

至元二十五年（日本暦・正応元年）、西暦で一二八八年です。その後、どれぐらいの時日がたつてからかは不明ですが、東明慧日は、明州府城（現浙江省寧波）天寧報恩光孝禪寺（天寧寺）に至り、曹洞宗宏智派の直翁德挙のもとで学び、修行の日々をすごすこととなります。

この明州の地は、中国禅宗五山のうち、阿育王山広利寺、天童山景德寺があり、栄西、道元など日本僧が中国禅を学ぶための入国地であり、また禅宗の一拠点ともなっていたところでした。天寧寺において東明慧日が德挙から痛捧の日々を送り、ある日、禅の悟り（契悟）を得ます。このときのようすを「塔銘」「聯燈録」「本朝高僧伝」が伝えていますが、「塔銘」は次のように書いています。

「乃ち、すなわ 挙和尙（直翁德挙）の郡城（明州府）天寧寺てんねいじに参ず。一日、いちじつ 挙（德挙）、空劫已前の自己の話を以つて、はんぷく 返覆し之を徹す。語の未だ竟わらざるに、ほう 捧にて出

だす。翌日、再び造り、反して拳の話を以って、逆えてこれに詰める。拳（徳拳）、蒲団を索む。纒に接して、復た即就ち打つ。是ここに於て契悟す。」（「塔銘」）

読み下し文にしましたが、徳拳と弟子東明との二人の間に、敵しさと、ピンと張りつめた緊張した空気が伝わってきます。悔悟する瞬間のできごとが描かれています。

「ある日、徳拳は、東明に〈空劫已前の自己〉の話則の答えを求めては、また問いを繰り返し、（悟りをうながすために）徴詰した。いまだ東明の答えにその境地に至ることがないため（答えを途中で制止し）捧喝し打ち出した。そしてその翌日再び徳拳に対すると、東明は〈空劫已前の自己〉を徳拳に対して（その意を求めて）逆に返し詰め寄った。徳拳は、「我がために蒲団をもつてこい」と答えた。（東明が、蒲団を渡そうとする、そのとき）徳拳はわずかな間をはかって、また捧にて打った。その瞬間、東明は禅の悟りをえたのだ。」というのが大意です。

る佐藤秀孝先生の文章が、『曹洞宗教義法話体系 第二巻 曹洞宗』（一九九〇年刊）の「五、中国曹洞宗の展開」に載っていますので、次に引用します。

「真歇禪師と宏智禪師は、ともに丹霞子淳禪師の法を嗣いだお弟子ですが、子淳禪師に参学していた時期が相違していましたが、修行時代におふたりが会うことはありませんでした。しかし、おふたりは時期は別ながら、ともに丹霞子淳禪師の席下で〈空劫已前の自己〉を究めておられます。〈空劫已前の自己〉とは、すべての事象が起る以前、あるいは世界の起る以前の絶対的な自己のありようのことであり、〈本来の面目〉ということばでも表現されます。迷いや悟り、凡夫か聖者といった分別対立を超えた自己本来の消息のことです。いわば天地宇宙の真実を体現して自己の当体といってもよいでしょう。当時の曹洞宗はこの空劫已前の自己を座禅のすがたとしてとらえようとしたの

### 空劫已前の自己——師の「活作略」により悟る

ところで「空劫已前の自己」とは、どんな意味なのでしょう。禅の真理を示すことばであるくらいことは筆者にもわかりますが、付け焼き刃の知識で語るには難問過ぎますので、佐藤秀孝先生の解説を引用させてもらいましょう。

「空劫以前の自己とは法祖宏智正覚より以前から曹洞禪者が問題としてきた黙照禪の課題であり、一に〈父母未生已前自己〉とも呼ばれ、本来の自己とか自己本来の面目などを意味している。いわば仏性の内在性を表現したものである。」（⑤二一四頁）

この部分を、もうすこしやさしく法話として示してくれてい

です。そして、真歇禪師や宏智禪師は、子淳禪師のもとでこの真実を学び尽くされたのでした。それが、のちの黙照禪の唱導へと連なるのです。（二一四頁）

この文章が載る法話集では、「黙照禪」とそれに対置する関係にある「看話禪」との違いについて、「それは現実の人間をどうみるのかという人間観の相違といってもよいものです。…中略…いわば仏の悟りの世界から眺めるか、人間の迷いの現実から眺めるかのちがいでした。」（同二八八〜二八九頁）と書いています。

さらに、同文に続けて「そのために、座禅に対するとらえ方もおのずと相違してきました。黙照禪では、座禅は本来の自己に親しむ姿ですが、看話禪では座禅は本来の自己を求めて修行する姿となります。座禅を絶対の行とみるか、単なる悟りのための手段にすぎないとみるのかの相違です。」（同二八九頁）と書いています。

黙照禪と看話禪の、見た目には対立する二つの流れは、宏智正覚から法を嗣いだ東明慧日禪師が生きた時代における中国の曹洞宗と臨済宗の特徴をもつともよく表現した「禅思想」であったのです。佐藤秀孝先生は、この法話の中で説こうとされた主旨は、「のちに道元禪師は、このふたつの流れを超克され、新たな道元禪を確立されるのです」と言われるように、近代から現代に進んだ禅思想の本来の姿とは、宗派による、いわゆる修行や接化の「型」のちがいを乗り越えた「本質」にあるということなのではないかと思えます。この佐藤先生の法話は、とてもわかりやすくまた面白くかかれておりますので、さらに知りたい方は、図書館でお読みいただくことをおすすめします。

さて、東明慧日が契悟する瞬間を描いた「塔銘」のドキュメントにもどります。この悟りを得る場面で、何度読んでもよくわからないところが、「蒲団をもつてこい」と徳挙が問いかけ、東明がそれを徳挙に渡そうとする場面です。この師と弟子とのかけあいのような行動が、なぜ「悟り」につながるのでしょうか。

「あたまで概念化して観念で答えを探そうとするな」「ありのままのお前がそこにいるじゃないか」「空劫已前」という世界も「自己」の行動や思考という現実があるから存在するんだ」ということなのですね。ようやくおぼろげながらわかりかけてきました。

つまり、「空劫已前の自己」とは、「空劫已前」と「自己」とをそれぞれ分離して、それぞれの意味を考えるものではなく、「ありのままの自分」の存在にまず気づきなさい、という、一体となったことばとして理解すべきなのでしょう。

## 白雲庵ゆかりの白雲山を特定する

東明という道号については、将来の日本とのかかわりを持つ因縁がこめられているといえます。

「語録」の末に付録「塔銘」に続けて「示東明日上人」という

か。

このことについて、佐藤秀孝先生は、「活作略」という悟りに導く手法であったと書きます。つまり、東明が、方丈（住持の居室）にいる徳挙に、空劫以前の自己についての真意を問います。これに対し、徳挙は、蒲団を求め、東明がこれを渡そうとするやいなや、捧でうちすえられます。これが徳挙にとつての「活作略」でした。そして、「おそらく」ということばをそえて、徳挙が真に導きたかった意を、次のように書いています。

「徳挙が蒲団を求めたのは、おそらく、空劫已前の自己を概念化せず、現実の活撥撥地なはたらきのなかに具現していくことを意味するものであり、動用の中に真理を見い出さんとするものであったといえる。そして、慧日はそんな徳挙の示す体用一如のありようを悟ったわけである。」⑤  
(二一四頁)

法語が載せられています。「東明日」は諱の「慧日」の下字「日」だけをしめす書き方で、読み下せば「東明日上人に示す」となります。明極楚俊（一二六二〜一三三六）という臨済宗松源派の人が、諸国を遊歴していた紫金山に修行者として寓居していた東明にあてて書き記した法語です。

東明より九歳年長の同郷の先輩格の人でしたが、来朝するのは、一三三〇年と遅く、塔銘の選者で既述した竺仙梵僊の来朝に同行してやってきました。南禅寺第十三世、建長寺第二十三世住持などを歴任し、京都鎌倉禅林に大きな影響を残し、いわゆる「臨済宗明極派」の法統をたて弟子たちにその法を嗣いでいます。

彼によって示された「東明慧日」についての考証は、「大明は東より生ず」と同様に「日」もまた日月星が生ずるにちなむとということを示したもので、契悟の前、日本に徒来する十数年もまえに示されていたのですから、「なにかしら因縁めいた」もの⑤があつたようです。

各地の遊歴をへて故郷明州にかえり契悟した天寧寺にしばらく住したのち、明州明堂にある白雲山宝慶禪寺の住職を請われて開堂出世します。大徳六年（一二三〇二）五月八日、三十一歳となっていました。この白雲寺の開堂に際して、師直翁徳挙のために嗣承香じじょうこうを焚き、徳挙の法嗣として、曹洞禪者の活動を始めることになったのです。

ここで、すでに「白雲山でつながった縁」のセクションで書いた、徳挙との道交を深めた無学祖元が来朝前まで住した白雲山白雲庵（羅庵）と、東明慧日が住した白雲山宝慶寺の所在について、佐藤秀孝先生が平成十六年の論文⑥において新史料にもとづき報告されており、明州みんしゅうぎんけん 鄞県内に白雲の名を持つ山ないし寺が二ヶ所に存していることが知られるそうです。

明州鄞県は、現在の浙江省寧波とその周辺域に属しています。

- (1) 白雲山宝慶顕忠禪寺 〓 明州鄞県東五〇里の阿育王山（寧波市）に隣接する玉几山（寧波市）の南に位

置する明堂の地にあった。東明慧日が徳挙の法嗣となるべく嗣承香を焚いた地と推定される。

- (2) 白雲山延祥禪寺 〓 明州鄞県東南八〇里にある東銭湖（寧波市）の北にあった。無学祖元ゆかりの白雲山白雲庵（羅庵）と推定される。可挙（徳挙）が住持を務めていた可能性もある。

東明慧日は、白雲山宝慶寺には来朝までの六年間住職を勤めたことは「塔銘」「聯燈録」及び「語録」（住白雲山宝慶禪寺語録）によってわかっています。

この期間に、東明は、北条貞時からの招請の知らせを請けることとなります。その時日は不明ですが、貞時は、無学祖元禪師（仏光国師）と深い道交の関係にあった徳挙のこと、徳挙の法を嗣いだ高弟であり、東明の法兄にあたる雲外うんがいしゅう 雲岫（二四二〜一三二四）のことなど、曹洞宗宏智派一門の動静の一端を知っていたこととなります。雲外雲岫は、東明より三十歳

も年長であり、当時すでに六十歳代後半でしたから国を出てゆく選択肢はなかったことでしょう。

徳挙の弟子たちのなかでは三十歳代と来朝が可能で、曹洞禪の継承者として実績を知られていた白雲山宝慶寺住職の東明慧日が指名されたものと考えることができそうです。

こうして白雲山の縁でつながった東明慧日禪師の来朝が実現し、円覚寺住持について、獅子奮迅の活躍をし、円覚寺を退院し、寿福寺第九世住持についたのが文保元年（一二一七）で、東明慧日来朝から十年たったことまではすでに書いたとおりです。

東明慧日にとって、来朝までの在中国時代を第一期（出生から出家し徳挙の法嗣となり白雲山宝慶寺開堂まで）とすれば、円覚寺住持の八年間は第二期（来朝円覚初住時代）となり、文保二年（一二一八年）に建長寺第十七世住持についてから入寂する暦應三年（一二四〇）までが第三期（白雲庵学林の隆盛）と大きく位置づけてみました。

### 白雲庵学林の隆盛——来日後半期の喜びと悲しみ

東明慧日にとって、来朝から円覚寺住持を退院し寿福寺住持につくまでの十年間は、貞時という後ろ盾を失いつつも、重大任務遂行に負われ続けて過ぎ去った期間であったでしょう。

動静の記録を年次ごとにくずくずして年表に整理すると、建長寺住持就任以降の事蹟が、円覚寺、寿福寺、建長寺の再住記録を繰り返すのみで、具体的な東明慧日禪師としてのダイナミックな動きを示す事蹟を見つけられなくなっています。そのかわり、東明派の高弟である別源べつげん 園旨、不聞契聞ふもんかいもん や、中巖ちゅうがん 圓月えんげつ が、入元、帰国を繰り返す活躍の舞台を広げていく行動を白雲庵という拠点から裏でささえていくという役回りを担っていたのであろうと推察すれば理解できることです。

最後に、紙数も限られてきたことでもあり、東明慧日禪師の後半世のできごとを三つのキーワードでくくり、その功績の記

録を整理してみることにします。

(1) 鎌倉五山の住職〈再住〉のようす

まず、東明慧日禅師の円覚寺初住八年間をふくめ、住持就任経緯を整理してみると次のようになります。

○円覚寺（鎌倉五山）（二回）第十世

①延慶三（一三二〇）〜文保元（一三一七）年（八年）

②元弘三（一三三三）〜建武二（一三三五）年（三年）

○建長寺（鎌倉五山）（五回）第十七世

①文保二（一三一九）〜元応元（一三一九）年（推定一年弱）

②元亨二（一三二〇）年（推定数ヶ月）

③建武二（一三三五）〜暦應二（一三三九）年（四年）

④暦應二（一三三九）年（推定数ヶ月）

⑤暦應三（一三四〇）年（推定数ヶ月）

○寿福寺（鎌倉五山）（二回）

①文保元（一三二七）年（推定一年強）

②嘉暦三（一三二八）年（不詳）

○万寿寺（鎌倉十刹）（一回）

①元応元（一三一九）年以降（期間不詳）

○東勝寺（鎌倉十刹）（一回）

①元応元（一三一九）年以降（期間不詳）

○寿勝寺（肥後）他諸寺 後述

円覚寺初住八年後、寿福寺をへて建長寺に入院、第十七世住持にきましたが、征夷大将軍守邦親王、および北条高時のための陞座説法をおこなったほかに、東明慧日禅師にとっては、来朝以来心残りになっていたことが師直翁徳挙・静慧日禅師「大和尚」の慈恩に報いるための法要を行うことでした。このような法事はありませんが、大久保道舟氏が「建長寺に住することわずかに一星霜にみたく」と書くように、高時からの任命によ

って建長寺住持に就いたものの、記録に残るような出来事に対応することはなかったようです。建長寺三住を命ぜられるまでの「約十六年間の消息甚だ詳らかならずものがある」と、大久保氏も続けて記しています。

ただし、東明慧日禅師の動静で、注目しなければいけない出来事が、建武中興以後、後醍醐天皇の命を受けて、建長寺三住、四住、五住を、入寂するまでの五年間のあいだに、その重責を果たしたこの意味は、以外にも大きいような気がします。いずれも晩年となった東明慧日禅師が、戦乱と政治的空白きに、荒れて無住となっていた歴史ある五山の建長寺、円覚寺の維持再興への礎となつて命にこたえようとした敵を作らない温和な人柄ゆえの調整役という人物像が奇しくも浮かび上がってきたのではないのでしょうか。

(2) 〈白雲庵学林〉の隆盛

この東明恵日禅師にとって来朝後の後半生は、「語録」や「聯

燈録」のなかでは空白期間となっているのですが、実は、この期間には、東明慧日禅師の高弟や来朝僧たちによつて、この鎌倉のなかでは白雲庵を中心に漢詩を吟じ、詩作論や文学論をたたくわす五山文学隆盛の時代を迎えようとしていました。住持としての公務を終えた東明慧日禅師は、白雲庵を、こうした門弟らの会合する学林とすることを、曹洞宗宏智派という小教宗集団が生き残るために積極的にすすめていったのでしよう。

同庵には、東明の侍者として最も信頼の厚かった別源圓旨べつげんえんじ、同様に不聞契聞ふもんかいもんをはじめとして、東白圓曙、少林如春、大虚契充、等実質「文学者」たちが専任することとなりました。入元して、中国五山のリーダー格であった古林清茂くりんせいむをはじめ、諸方の学林に参学して、帰朝し、多くの鎌倉五山文学僧を輩出したのです。「白雲庵文壇ともいふべき友社を形成し、関東五山の文学活動の中心をなした。」と玉村竹二先生は表現しています。のちに臨済宗にうつり東明慧日禅師を悲しませた、中巖圓月ちゅうがんえんげつに対しても、東明禅師は、その入山にたいして何の制限も加える

ことなく、中巖円月の才能を高く評価し、吟詠雅懐の交わりを深めたといえます。

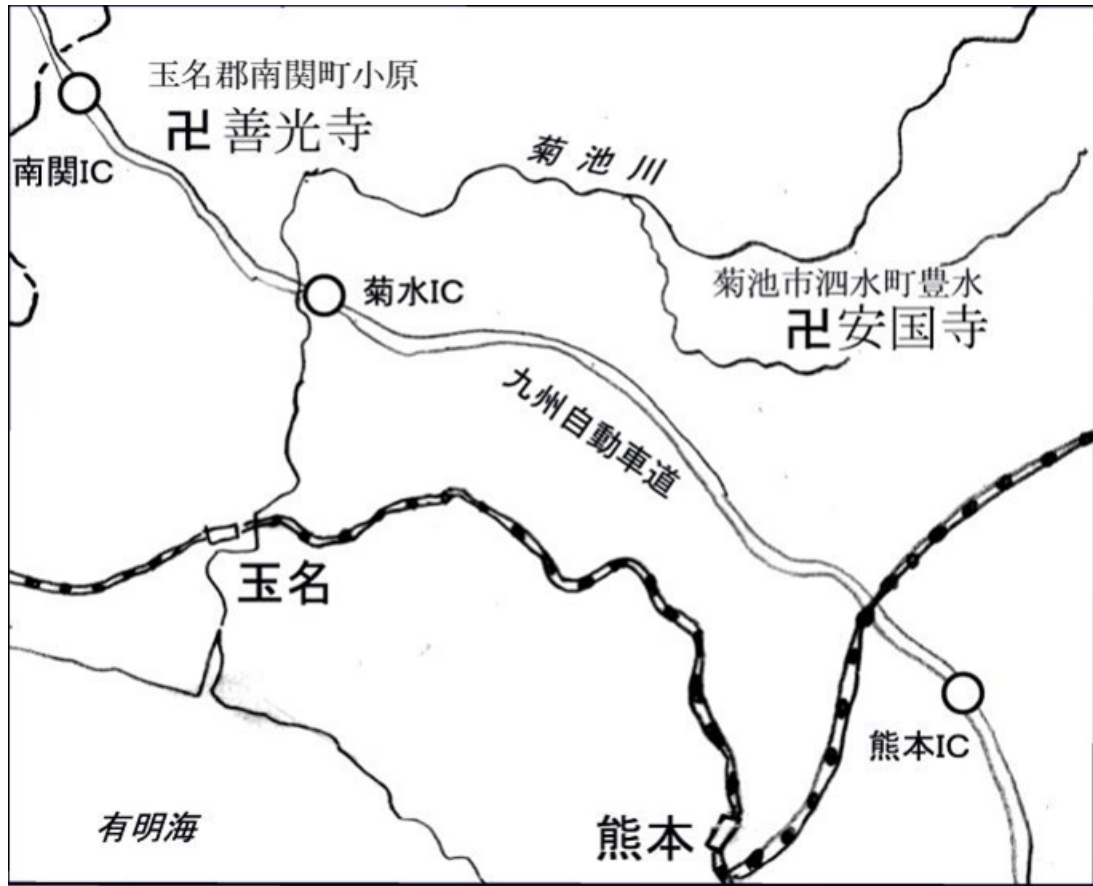
中巖の代表的な漢詩集である『東海一漚集』に、白雲庵学林をうたった七言絶句がありますので引用しておきます。

白雲庵	中巖圓月
白雲堂上白頭師	白雲堂上 白頭師
堂下諸郎誰白眉	堂下諸郎 誰白眉
兄弟團欒相語処	兄弟團欒 相語処
莫忘餬口四方兒	忘れる莫かれ餬口 四方の兒

声に出してよんでみますと、東明慧日禪師（白頭師）を中心として、師の兄弟たちが語り合い、また、自分たちの本文も忘れてはいけなさと釘も刺しながら、自分の優れた詩作（白眉）にも忘れず眼を向けてくれよ、と中巖の師を裏切つて宏智派を棄てて臨濟宗の立宗派に転じた心の苦しきも少しはわかってほ

しい、……というような、白雲庵文壇の内実を微妙に表現しているのが伝わってきます。

さらに、曹洞宗というよしみもあつてか、永平下曹洞宗の寒巖義尹門派の無聞口聰、古桂智芳、立庵□本ら諸師も白雲庵に寓住しています（□は史料上に判読不能の字をさします）。貞時は、臨濟宗一色のなかに東明慧日禪師の曹洞宗宏智派を招請し、宗派を超えた禪宗の理想をもとめたのですが、現実の歴史は、白雲庵が先例となつて退去楼としての塔頭□の宗派、派閥の私的僧院が風靡することとなりました。皮肉にも、本流の宗教活動ではない、文壇のなかで「宗派を超えた切磋琢磨」が出現したことに、最も悲しみをいだいていたのは、東明慧日禪師本人であつたらうと推察されます。なくなる寸前の「遺偈」〔最後に弟子たちに残す詩の法語〕に示された「青天在水」の意味は、何の憂いがないすがすがしさを著していながら、達成されなかつた境地にたいする気持ちもまた伝わり、深く、重いものがあります。



白雲庵は、一三〇〇年から一四〇〇年にかけて、円覚寺内における最初の曹洞宗宏智派の本拠地となつた上に、禪林中心の最も華やかな文芸活動をも展開した。まさしく、黄金時をむかえました。宏智派の東明慧日禪師の法統は、後世まで伝わることはありませんでした。

### あとがき——熊本寿勝寺に伝わる東明禪師法衣の真相

三番目の出来事とは「肥後寿勝寺」開山についての検証です。平成元年（一九八九）の四月上旬に、熊本県菊池郡豊水の上村医院という開業医の奥様がたを含め約二十名が、突然、白雲庵に訪ねて来られました。聞けば、東明禪師の墓参に伺つただといわれます。東明禪師との関係については、上村医院のすぐ裏にある安国寺という寺が、東明禪師開山の寺であり、そのほかに、菊池郡内には東明禪師ゆかりの寺が三カ寺程あるといふのです。

奇しくも、この時は東明禪師示寂六百五十年という年に当たっていましたので、白雲庵の磯谷和尚は、すぐさま、熊本行きを決意され、母上久子さんと、「門前」の近藤さんを連れて同年七月二日、熊本に出発した。

まず、泗水町豊水久米村の安国寺を訪れました。寺は本堂というより、むしろ広い母家のつくりで、正面には本尊の釈迦牟尼坐像、右の須弥壇に、摩訶迦葉像、東明禪師像、阿難陀像の三体を祀り、左には近年造られた陳列ケースに、菊池政隆像、聖観音像などが納められていました。

泗水町の郷土史『合志川芥』によると、「元応年中（一三一九～一三二一）、東明和尚合志郡住吉天応寺に滞留の時、寿勝寺を再興」といい、「当時、四代別源和尚、護法山安国と寺号を改め、天台宗となる」と、あります。『泗水町史』には、「安国寺は、初め青原山寿勝寺と号し、平安時代には十二坊を有する天台宗の名刹であったが、その後、衰微していたものを、東明慧日和尚が再興したと伝える。」と記しています。

東明慧日禪師来朝七百年を記念して「白雲庵物語」を檀家の皆様方に読んでいただくこうと、作製するにあたり、再度熊本を訪れ、東明慧日ゆかり安国寺を訪ね、東明慧日禪師が着用したとされる法衣や坐像などの写真を撮影してきました。

さて、この寿勝寺、あるいは寿勝安国寺について既述郷土史料、町史に記された原資料にさかのぼって、東明慧日開山と肥後当地訪問が史実に基づくものかどうかを整理し載せておくことにします。

これまでに東明慧日と肥後寿勝寺の開山について記された資料を年代順にしめておくと次のようになります。

(1) 一三一九年(元応元年) ①新撰事蹟通考(第七) Ⅱ(ア)

「按二此国安国寺ハ合志郡久米村ニアリ。初、青原山寿勝寺ト云、禪宗曹洞派開 山東明和尚也…中略…元応年中來肥後、居玉名郡小原村善光寺、其後合志郡開建青原山寿勝寺」

(2) 一三二二年(元亨元年) 「肥後国寿勝寺誌」(イ)「元亨年中東明和尚住之時天子下綸命、將軍家下署状、守護職其命故当寺下護云々」(ウ)「寄進、肥後国古保里莊内佐野寺免田事合十一町者ノ右件田地者、…寄進之地也。…以下略。元亨元年辛酉二月二日、遠江守朝臣、東明和尚。」

(3) 一三三〇年(元徳二年) 「肥後国寿勝寺誌」(エ)「寿勝寺住持職事、可致被沙汰之状件ノ如シ」元徳二年三月九日崇鑑、円野首座禪師「(才)「肥後国寿勝寺可為諸山列候可被其旨存候恐々謹言。元徳二年六月。沙弥崇鑑」

(4) 一三三三年(元弘三年) 「肥後国寿勝寺誌」(カ)「当国寿勝寺当知行地事任去九月二十九日」綸旨可令地行領掌候…以下略。元弘三年十月八日、肥後守、東明和尚

(5) 年次期日不詳の史料「明極礎俊遺稿」(キ)「東州郢長老、寿勝ニ住スルヲ送ルノ子承父業有来由ノ派統青原接上流ノ以下略」(竺仙梵僊「來々禪子東渡集」)(ク)「郢首座、青原山寿勝寺ニ住ム、諸山疏ノ前略ノ胸氣已横九州ノ以下略」

「月蓬見禪師塔銘竝序」(元弘年中 Ⅱ一三三一～一三三三年)(ケ)「東明派弟子の月蓬円見が寿勝寺第三代住持就就く」①

(6) 年次期日不詳の史料 「白雲東明語録卷中」(コ)寿勝郢長老ニ示ス(東明慧日の法語)ノ前略。肥州寿勝古刹始ヨリ、諸山ノ之ノ列ニ預リ、帥府辟命ス。「洞春庵別源禪師定光塔銘・東海一漚集第二」(タ)寿勝寺第四代住持に別源円旨が就き、康永元年(一三四二年)にその要請により現地に赴くこと。

これらの肥後国寿勝寺、あるいは寿勝安国寺については、大久保道舟氏の「東明恵日の宗風とその門流」①において、明快に論証されております。その論証の資料は上記に示しましたので、結論のみしめすことにします。

熊本県久米村の現在も東明慧日禪師ゆかりの品々を保管され展示されている「安国寺」は、東明慧日が寄進を受け、開山し

た「古保里荘内佐野寺」＝肥後国寿勝寺とは、直接的なつながりは不明な部分が存するのですが、開山の期日を元亨元年（一二三二年）を有力として、東明慧日が初代住持、第二代が慧日派の弟子である白雲首座の円郢（えんよう）<sup>えんよう</sup> 禅師、第三代が月蓬円見禅師、第四代に慧日高弟の別源円旨が就いていることは明白な事実であることがわかります。

ただ、問題は、東明慧日禅師が、元亨元年から二年のころ（一二三二～三三年）に開山住持として寿勝寺に直接赴いたかどうかの、証拠は見つかっていないようです。

しかし、「寿勝寺は由来古保里荘公文職榮明が代々相伝管領していたのであったが、中途東明が住持となり、寺領をも知行するに及んで、榮明はその回収運動に努めたのである。ここに於いて、一方東明の方も（官からの正式知行を認めた）安堵の下知状を度々申請して、これに対向したものと見える。然るに榮明は東明が円覚寺白雲庵に帰ったのを期として、再び其の相伝管領を申請したが、まだ完全に回収の功を奏せざるを以って、

暦應三年東明の示寂するや、よく四年三月更に訴訟を起こして官の成敗を請うたのである。」と、東明禅師が、熊本に自らの足で出向いたか出向かなかったかの問題ではなく、寿勝寺という寺領の価値の大きさと、なまじの経営では、知行として寄進を受けた事実がホゴにされてしまうという危うい寺領経営の事実から論証しようとした。

一年ごとに直々の、それも四代住持には最高ランクの東明慧日禅師の右腕的な高弟別源円旨<sup>べつげんえんじ</sup>を送り込んでいる事実は、小派閥を維持するためにも数少ない寺領を手放したくないという、東明禅師の強い意志が働いているということなのです。たしかに、記録としては、直接行った証拠はないけれども、建長寺の初住を辞してから北条貞時の一三回仏事のために再住をする、元応二年（東明四十九歳）～元亨元年（五十歳）のあいだの九州往復する時間的な余裕は十分にあるということです。

状況証拠に過ぎませんが、九州の熊本という地への出張旅行は、来朝してிரらい、張りつめた心と体を休めるのには絶好の

期間であったかもしれません。さらに、九州という地は、福岡を経由したかもしれませんし、恐らく船を使っただと思われませんが、東明慧日にとつて、すこしでも故郷明州（浙江省寧波）の海港に近づきたいとする望郷の心が、旅へと足を向かわせた可能性は高いという気が致します。現地のお寺様で保管されている法衣は、大切に保存され、将来の新史料発見の時にも重要証拠として使えるようにして置いていただければと思います。

東明慧日禅師の足跡をたどりながら、禅宗の歴史と鎌倉時代の激動の時代にスポットをあてて、白雲庵の七〇〇年もの長い歴史のすごさをまざまざと見て、感じさせられた想いがいたしました。

（了）

#### 【主な引用・参考文献】

- 「禅宗史要」（曹洞宗青年夏期講習会講演集）同会編。鷲尾順敬著。一九〇一年。鴻盟社）国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」<http://kindai.ndl.go.jp/index.html> 所収。
- 『日本禅宗史要』（孤峰智瑛著。1908年。貝葉書院。）国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」URL右同所収。
- 「東明慧日の宗風とその門流」（第一義第二十九卷9号。大久保道舟著。一九二五年）（本文引用略記①）
- 『禅宗の歴史』（日本歴史新書。今枝愛真著。一九六二年。至文堂）
- 『日本中世禅宗史』（荻須純道著。一九六五年。木耳社）
- 『円覚寺史』（玉村竹二・井上禪定著編。一九六九年。春秋社）
- 「白雲東明和尚語録 考」（曹洞宗研究員研究生『研究紀要』第7号。石川力山著。一九七五年。曹洞宗務庁）（本文引用略記②）
- 『禅宗編年史 正編』（白石虎月編著。一九七六年。東方会。観音堂昭和十二年刊の複製本）
- 「東明和尚語録」（『五山文学新集』別巻2。玉村竹二編著。一九八一年。東京大学出版会）（本文引用略記③）
- 「東明和尚語録 解題」（同）（本文引用略記③）
- 『曹洞宗教義法話体系』第一巻（田中良昭編。一九九〇年。同朋社出版）
- 「元代曹洞禅僧列伝上」―天童山の雲外雲岫について」（『駒澤大学佛教学部論集』第二十三号。佐藤秀孝著。一九九二年。駒澤大学）
- 「元代曹洞禅僧列伝（中）」―東明慧日と東陵永瑛の来日以前の動静」（『駒澤大学佛教学部研究紀要』第五十一号。佐藤秀孝著。一九九三年。駒澤大学佛教学部）（本文引用略記⑤）
- 『南関町史』地誌下（南関町史編集委員会編。二〇〇一年。南関町）
- 『五山禅僧伝記集成 新装版』（玉村竹二著。2002年。思文閣出版）（本文引用略記④）
- 『建長寺史 編年資料編第一巻』（建長寺史編纂委員会。二〇〇三年。大本山建長寺）



「明州天寧寺の直翁可挙について―南宋末元初における曹洞宗宏智派の動向」  
『駒澤大学佛教學部研究紀要』第六十二号。佐藤秀孝著。二〇〇四年（本文引用略記⑥）

『日本洞上聯燈録』巻一（青松寺秀恕著。享保二十・一七三五年刊）（明治十八年、大内青巒校訂、鴻盟社発行）（本文略記「聯燈録」）国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」<http://kindai.nli.go.jp/index.html> 所収。

『本朝高僧伝』巻二十六（正元師續著。元禄十五・一七〇二年刊）国会図書館蔵本「大日本仏教全書」81-160（仏書刊行会編）中 101～103（本文略記「高僧伝」）



「本稿は、大本山円覚寺塔頭 白雲庵（磯谷晴雄）を発行者とする『白雲庵物語』（白雲庵・東明慧日禪師来朝七百年記念事業推進委員会編。発行〓平成十九年十月二十八日）（同表紙―上図像）に掲載された「東明慧日禪師の大きな足跡 その二」に、引用文献参考資料等を加筆しPDFとしたものです。」